

アラソン

ノルマンディー人
のプロポ III
【2014年5月号】

翻訳：高村昌憲



九十一 畏敬と恐怖 (LE RESPECTE ET LA PEUR)

或る人が昨日とか今日の皇帝と向かい合っているのを感じる、と語っていました。「私は震えました」と彼は言いました。彼は自然のように思いますし、そのことを聞いた人も同じです。私たちは現在も君主制の汚れで覆われています。

理由があつて殺したり、あるいは気まぐれで殺されたりする、力があつて乱暴な人間の前に出れば震えます。それは自然な結果です。人は他人から身を隠すことは出来ますが、自分自身から身を隠すことは出来ません。私としては、確かに危険な人物の前では震えて、彼に対して何も出来なくなつても決して恥ずかしいとは思いません。最も高い美德は、自分からやろうとすることが出来ることだと思います。それは最も合理的なものの状況から生まれます。もしも何もやれないなら、まさに震えていなければなりません。つまり沢山の行為を始めても、止めなければなりません。この受刑者は、斧の一撃を受けるように震えを受けます。

しかし、現代の〈皇帝〉が問題になる時、一世紀か二世紀前でも同じですが、何処に斧はあるのでしょうか。何処に拷問があるのでしょうか。勿論、気に入らないかもしれませんが、何らかの進歩も失っています。あなたの足から首まで襲うこの死の戦慄を、それは正当化出来るのでしょうか。

殆ど何時も人は何かを答えます。「あなたは何をしたいのですか。そんな風です。私は道徳から足までの説教をするのでしょうか」。しかし道徳からは、足や腕までの説教しかありません。人間という動物を調教しない道徳は、恐らく平凡なお喋りでしかありません。更にその上、あなたの足が国の財政や昇進のために震え出しても、そんなにも愚かなことにならないでしょう。間違つた判断、軽率に抱いた欲望、あなた自身の管理が悪いために奴隷となつた足を、あなたは作り上げたのです。

或るアカデミー会員が話の始めに恐ろしいことを語つた時、哀れみが生まれます。私は、その人が次のように言っているように、それは未だ少し阿諛であると信じる方が好きです。「私はあらゆる権力が恐いのだ。私が震えているのを分かって下さい。奴隷の手と足です。私はあなたと付き合うに相応しい者です」。贅沢なこの恐れは、奴隷制度のコンセルヴァトワールの学校においては、すっかりあなたの代わりになるのでしょうか。

全てを作り直さなければならぬと私は考えます。私たちは民主主義を支持する者です。これらのアカデミー会員の感情の痕跡は、最後まで全て消失させることを私は要求します。最悪の不平等は、その恐怖の中にあります。そこからは、少なくとも法律が及ばない権力が既にあるということです。静かに現実のものになりすますこと、物事を生じる儘に言うこと、物事を発見するまでの言葉を探すこと、そこには共和主義的な雄弁があります。そうして、それが大きくならないことは決してなく、ドナウ川の農民の家ならどんな家にもあることを良く知って下さい。小さくして仕舞うことには何時も恐怖があります。恐怖には決して敬意がありません。恐怖には侮辱があります。何故なら恰も話の話題にしている人は、話をしている人であるかの如くであるからです。「あなたは恐ろしいほどに残忍だ」。もしも私が王であつたなら、震えている人が偽つて

敬意を払っても、侮辱していると思います。もうびっこを引かないように訓練しましょう。そして私たちは、もう鎖を引かずらいことです。

(一九一〇年五月七日)

ジャンヌ・ダルク祭の旗を見て、私はシャルル・ペギー著『ジャンヌ・ダルク』を一読してみました。ざっと眼を通したのであって、読んだものではありません。何故ならその本は長編で、何回も少し同じ様なことが書かれているからです。続編が十巻もあるとのこと。結局のところ私は、少ない言葉で偉大なる思想を説明する人々の方が好きであるからです。そう言い終わって私は、このジャンヌ・ダルクの歴史は偉大であり、ペギーは何時でもその偉大さを弱めなかったと認識しなければなりません。ですから、もしもあなたがペギーの『ジャンヌ・ダルク』をお持ちなら、読んで下さい。我慢してでも読んで下さい。冗談を言っているではありません。あなたは、この有名な娘の心の中の大挙出発を理解するでしょう。羊飼娘でしかなかった間に、如何にして彼女の運命が予め全て定められていたかをあなたは理解します。如何にして彼女が、心の裡で偉大なことのために出発したか、既に絶頂しか見なかった偉大な人生のために出発したか、そのことをあなたは理解します。

私にとっては、ペギーという荘厳な船に乗って、ある時は高く、ある時は低くなって自問して怪しむようになりました。ジャンヌ・ダルクの歴史で崇高なのは誰でしょうか。私が信じたとしても、神や大天使の行為は確かではありません。何故なら神がいる処に最早荘厳なものは何もなく、美さえもないからです。もしも私が神を人間の歴史に向かわせていたなら、人間は最早奇妙な操り人形でしかないでしょう。ジャンヌ・ダルクも同じです。私は人間の勇氣に決して驚嘆しません。それを与えるのは〈神〉です。勝利ではありません。何故ならイギリスを追い出したのは〈神〉であるからです。更にそれをもっと子細に見るなら、私は余りに醜悪な天上の暴君を見付けるでしょう。暴君は人間の何らかの激しい反乱によってイギリスを追い出すことをせずに、鬭争や悲惨な火刑に哀れな娘を投げ入れて楽しんでいるのです。

しかし、このことを人間的に捉えてみましょう。それが如何に偉大であろうと、人間的に捉えてみましょう。イギリス人たちは私たちの国には何もすべきことがなく、彼らの国へ追い払うことを極めて切迫している風に考えていた一人の羊飼娘がそこにいたのです。私たちは不正に反対し、暴君に反対して、この種の考えを誰でも持ちます。しかし、それらは思想としては幽かな光です。でも彼女においては燃え上がるような思想であり、その思想を人に話します。余りに偉大な思想であり、彼女にとっても大変に重大です。その結果、神や聖人の名誉となるのです。それは彼女には出来ますし、その術を知っているのです。それは思想という驚異的な働きです。更にもっと美しいその思想は、現実のものになりたがっています。彼女は出発します。あらゆる希望に向かい、厳密な良識に向かって出発します。決して討議せずに行動しなければならなくなるや否や、現実のものにします。彼女の行動は全てがそんな風です。怠惰でなく、躊躇せず、饒舌のない思想です。無能な人は丸太棒を握り始めて、良く復讐します。彼女は焼かれましたが、当時の官僚体制にとって彼女は精神と意志の人でした。確かにそれは多分、人間の最も美しい歴史です。全てのヒロイズムは先を読みますが、臆病も同じです。それは絶対的に人間のドラマです。しかし、神をそこに置いてはなりません。それは英雄たちの品を低めるための手の込んだ巧妙

な最後の仕掛けです。

(一九一〇年五月九日)

九十三 死んだ人々 (LE PEUPLE DES MORTS)

二人の人が、選挙のことを興奮して話していました。先程からそれを聞いていた三人目の人が言いました。「あなた方は大変に若い。私はもう投票もしない。あなた方もそうなるだろうよ」。それは死者を見るように恐ろしいことです。しかし、死体が話をすると、最も寛大な人でもぞっとします。二人は、各人が残りの人生を胸に抱き締めながら、その場から逃げ去りました。

地上には何体ものミイラがあります。出発することは美しいことです。見ること、知ること、行動することは激しい欲望です。広い世界を探検することです。怒りでさえも喜びになります。彼には策略がなく、卑劣さもなく、考えもありません。全人生が、人生そのものから外れた方へ身を屈めます。大道が描かれ、灯台のように明るい希望になります。おゝ、魔法使いの青春よ。生涯はその様に始まります。「世界を救いに来る者に祝福あれ」。如何なる揺り籠であっても、その近くにいれば子守歌を上手に歌えます。母親なら誰でもその歌のリフレインを歌います。母親というものは一瞬処女になります。子供というものは一瞬神になります。

死んだ人々は、そのことを大変に良く知っています。死んだ人々は全てを知っています。教えられた科学も知っています。博物館に展示されている科学です。札が付けられて展示された骸骨です。それ故に、生きているこの幼い神を、文字通り殺すことが重要なのです。宝物と香水を持って東方の三博士はやって来ます。崇拜、称賛、契約です。行きましょう、幼い者よ。もしもあなたがすっかり神になりたいのなら、働かなければなりません。働くことは、つまりもう事物を見ないことです。言葉を覚えなさい。自分の中に、小箱の中のように全てを集めることであり、保存することです。何をでしようか。全ては死者たちの灰です。歴史という幾つもの世紀です。実際には永久に死んでいるもの全てです。ファラオの王たち、アタリヤたち、ネロたち、フランク王たち、全ての多くの人々です。「見なさい、幼い者よ。あなたの後ろを見なさい。後ろ向きに歩きなさい。模倣しなさい。繰り返しなさい。やり直しなさい。上手に話せるようになれば、上手に考えることも分かるでしょう」。

次は科学です。彼のための科学はありません。それは化石になった科学です。公式であり、やり方です。急ぎなさい。それが言われて来たことの全てです。あなたもそれを言うことを覚えなければなりません。王位の冠は力尽きています。それは自らを抑え、閉じ籠もり、訓練されます。耐える肉体に、ミイラのような細い包帯が巻かれます。そこにあるのは死です。死んだ人々の仕事にとっては良いことです。

或る人々は生き残ります。包帯を切ります。もっと適切に言うなら、他の人々も解放したいと思えます。死んだ人々にとっては討議すべき重要な主題です。何故なら全てが失われていないからです。別の関係が幾つもあります。金色の包帯があります。職業、結婚、法規、交際、礼儀、アカデミー会員の衣服です。あらゆるサイズがあり、あらゆる力があります。妨害、綱、輪差結びです。生きている人々の狩をすることは、死んだ人々にとって最高の喜びです。「十分に駆け回ります。狩の時間は長くなります」。しかし、いずれは終わります。死者たちの中で最も賢明な者は、次のような厳粛な話をします。「私も又生きていた。そのことを私は知っている。そう

して善にとっては大したことではないと私に思わせてくれ。そんな風に理解し、望み、そして行動することは間違いじみたことではない。行きなさい。青春の激しい怒りのことを私は知っている。それは熱があるのだ。病気なのだ。死んだ人々は、最後にはそこに入らなければならないのだ。私もあなたのようにだった。私は〈真実〉に向かって出発した。〈正義〉に向かって出発した。そのことを考えると私は疲れる。あなたもそのことを考えると、直ぐに疲れるだろう。そんな風に頑固にならないことだ。死んだ儘でいることだ。あなたは良いように理解するのだ」。

(一九一〇年五月十六日)

一九一〇年の〈大恐怖〉(1)を主題にして、歴史家が百年後を書くことを私は大変良く想像します。それが全て彗星と関連していることを、現代の新聞に見付けて分かっています。同じような出来事に関しての記録文書は、既に間違いなのです。何故ならそれは彗星とは別々に切り離された話であり、全てが単独の世界のように形づくられていると理解されるからです。それが生活の中の合理的な通常の暮らしとして受け入れないのは当然です。しかし誰もが理解出来るように、私の周辺や内部にも広がり続けています。各々の記者は、奇妙で一般的でないもの以外は注意しません。六頁の新聞は、人間生活の正確な光景を未来の歴史家たちに任せたいと思っています。一日中歴史家たちの記事を長くして繰り返さなければならないのです。「人は働いて、飲んで、食べて、眠って来た。誰もが商売や恋愛のことを考えて来た。誕生があり、死があり、病気がある。この季節には毎年のように狂人もいた。それで全てが上手く行っている」。この描写の中には、各々のものが戻る場所を守っています。この新聞には恐らく犯罪、不条理、パニックに代わるものが一行もないのです。何故なら人間性には驚くほどの英知があるからです。多分何時もそうであったのですが、歴史家は必然的に人間性を狂人のようだとか、馬鹿者とか、残忍な者と理解します。

そこでこの〈大恐怖〉を想像して下さい。以上は歴史家が述べたことです。新聞は最早他のことを語りません。毎日、男も女も死ぬことを恐れて自殺します。ここには祈るために集まります。そこには反対に陶醉の喜びの中で死にたいと願います。歴史家はその点では合理的です。科学の光は、哀れな人々の裡にまで這入り込むには既に程遠かったと歴史家は言いますが、そのことは余りに本当のことでしかありません。大部分の人は非常に恐かったと言いながら証明しますが、それは真実ではありません。誰にも、あるいは殆どの人に恐怖はありません。私はここで歴史を記録に委ねたいと思います。私が運命の夜の間中(2)眠っていて、絶対に普通どおりであったのは本当のようです。私の知り合いの人々も皆が同じ様に言います。あの彗星が二千カ所で大異変を起こすかのように三行で語られています。人々は良く「何という恐ろしいことだ」と言います。しかし、人々は全然動きません。

従って、千年に一度の恐怖の物語を読む時、その中に本当のことがあるか私は自問します。地上には当時もっと酷い狂気があるか私は自問します。私たちは平均してそれを見ていません。本当らしいこととして、今にも世界の終わりのことが話されます。陽気だった人々は笑っています。悲しげだった人々は泣いています。自分の喜びや苦しみと違うものは、恐らく誰も全て信じませんでした。

(一九一〇年五月二十日)

(1) ハレー彗星の尾が地球に当たり、人類が滅亡すると思っていた人々もいた。取分けドイツのバイエルン州・ババリアでは、聖職者たちによって特異な行列が組織された。

(2) ハレー彗星が地球に接近して七十六年毎に空に見えるようになるが、太陽の前を通過するのは一九一〇年五月十八日から十九日の夜であり、当時の人々には大いに関心があった。

多分、何らかの信心家を除けば、皆が宗教を持っています。宗教を持っているとは、証拠を考えずに信じることです。もっと適切に言うなら、証拠には反対することです。しかし、何でも構わずに信じることはありません。正義は不正よりも強いと信じ、最後には勝利すると信じることです。ジャンヌ・ダルクは、憚ることなく宗教的でした。何故なら勝利するために、正義を望むだけで十分とする思想で戦いに出発したからです。ゾラが有名な「私は弾劾する」(1)を書いた時、彼は宗教的な気持ちに動いていました。というのも恐らく彼は、何処でこの権利を行使出来るのか全く分からなかったからです。それにも拘わらず彼は押し進めました。

社会主義者たちは、憚ることなく宗教的です。何故なら、人間の情熱とそれらの結果を見るのは余りに容易でしかないからです。経験から十分に分かります。お金持ちや権力者になった者は、最早正義を今までと同じように見ようとしなないことは十分にあり得ます。従って同じ様に、何とか生活するのに必要な正義を持つ人々も、小さな利益を好むことは良くあることです。彼らにとっては手の届く処のものを好み、全体の勝利からは遠い処にあります。最も小さな改革にも沢山の利益と障害があります。そして次のように言ったのは今日のことでありません。「正義は弱者たちの叫びでしかない。それ故に正義と勝利は一緒に調和することが出来ない」。何もかも良く吟味していた社会主義者たちは戦争へ出掛けて行きます。

雲というマントを着た息苦しい小さな世界であると私が理解するこの世界は、彗星とか何か他のものによって一週間で破壊されかねないと言われていています。というのもそれは息苦しいガスとか何か小石の雨でないとしても、私たちは水とか火による多くの大異変を想像することが出来るからです。誰も私たちと何も約束をしませんでした。私たち一人ひとりの人生にあって、一時間でも約束されているものは何もありません。手堅い理性も約束されていないのは同じで、私たちは何かに興奮したり妄想を抱いたりします。しかし、正義は正義以外のものではありません。そして、そこにいるのは仕事をする人間という動物です。あらゆる力のことを考え、あらゆる力を望んでいます。一步一步歩いて、自分が望むものとしての蟻塚、自分が望むものとしての平等を再建します。

〈力〉を持つ手で人間は小さくて弱いものであること、正義は隠されていること、世界を変えたいと思うのは決して近視眼的昆虫に相応しいものでないこと、そして、もしも大空の高さから見詰めれば、結局のところ不平等が恐らく正義になっていること、それらのことを証明しながら、歴史の事実の力に頼りながら、自分を空しく高める間違っただけの宗教のようなものに反対することです。しかし、臆病者とか怠け者とかノイローゼ患者のような者でなかったなら、この様な楽観主義者の話は誰も聞きません。臆病などでない他の全ての人々は、大空が怒っているにもかかわらず、頑張って正義に向かって歩きます。この昆虫は力を信じて望んでいます。世界が残骸になり、百個の彗星の火炎と交差しても、その様な事実を無視し、その様な事実に反対して、なお信じて望んでいます。司祭たちは何も証明しません。

(1) エミール・ゾラ (一八四〇～一九〇二) は、一八九八年一月十四日にオーロール新聞に「私は弾劾する」を發表して、軍法會議の軍人や軍部首腦を攻撃し、証拠もなくユダヤ人のドレフユス大尉を有罪にした彼らを弾劾した。

学校での真の中立は、宗教上の信仰が問題になっている時は、私に言わせれば、少なくとも自分が出て行くことがあってはなりません。子供を悲しませたり、恥をかかせようとして失敗を嘲笑する度に、不寛容があります。私が知り合った数学の教師たちは、誰もが不寛容で狂信的でした。彼らは、火刑をするのと同じでした。罰として放課後に生徒を残し、罰の宿題を出し、そして何よりも冷笑していました。要するにローマ教皇でした。彼らは言葉のことしか考えませんでした。彼らが要求していた宗規に適った形式を脱して考えたことは、決して信じませんでした。要するに彼らは、ぎこちない言葉に基づいて真実の思想を解明する術を知りませんでした。間違いというものは真実を閉じ込めていて解明がされていないものであるという崇高な思想を、彼らは全く理解していないように見えました。それ故に彼らには愛がなく、正義もありませんでした。教義の専制君主であり、教会の譜面台で詩篇を歌う歌手でした。

「五掛ける十二は七二」と子供が計算する時、間違っただけであるとは言いません。それは決して全ての考えではないのです。寧ろ、数字を考える術を知らないと言いましょ。数字のことを考える代わりに言葉のことを考えると言いましょ。例えば子供のような間違いだと良く分かっていますが、一キログラムの羽毛は一キログラムの鉛よりも重くないと言う時、それは決して間違っただけではありません。私は寧ろ、話し方が間違っていると言うでしょう。彼が言いたいことは良く分かっています。同じ容量の羽毛は鉛よりも重くないと言いたいのです。彼が犯した間違いの中まで追って行くな、あなたは密度の濃い重要な思想を解明します。彼はそれを持っていますが、上手く説明する術を知らないのです。もしも、あなたがその点について彼を馬鹿にするのでしたら、それはまさしくイギリス人を馬鹿にするのと同じ理解力です。何故なら人に理解して貰うためには、フランス人の言葉を使うからです。

或る人が十三という数字は不幸を齎すと言う時、それを考えるや否や、もしも特に十三という数字に金曜日という言葉が加わって、無意識に考えられる不幸を思い起こす観念となり得れば、それが一番上手い表現になります。それでもあなたの嘲りというものは、その様にして気になる観念になります。更にその上、その傷口を傷付けながら、あなたの嘲りは更に彼を怒らせます。彼はこれら二つのことを一緒にして、もっと痛切に考えます。十三日の金曜日と、実現可能な不幸です。何が起きるのでしょうか。間違いを説明して理解することは、つまりそこから真実を生むことになります。その様にして、私たち一人ひとりがそれらの一致した結果を幸福とか不幸とかの何らかの対象と結びつくのを、彼に理解させることです。ラマルチーヌにとっての湖の悲しみは、過去の愛、人間の幸福の短さを意味します。あらゆる間違いがそうであるように、そこでの間違いにも真実があります。そうしてあなたはそのことを理解しながら、これら二つの観念を沢山のものに結びつけます。そこにある結び目は解けます。そして短く行き来します。

(一九一〇年五月二五日)

図書館司書の王である有名なセルヴレは、私が〈世界の歴史〉聖堂を訪問することを良く望んでいました。彼は言います、「それというのも、神の恩寵によって生まれてから歴史家でないとしても、あなたは丁度、歴史家になる年齢に達していると思うからだ。そしてあなたはそれに抵抗している。何故なら無知だからだ。友よ、全ての学問は人間の歴史という事実で出来ている。ですから歴史は全てを支配している。飛行機の歴史までである。それは飛行機の本当の学問である」。

私は彼に言いました、「そうですとも、歴史の中の歴史です。そして歴史の中の歴史の歴史です。しかし私は、正しいことは何も分かりません。教えて下さい」。

セルヴレは言いました、「最初から始めよう。勉強するには本を読まなければならない。本を読むには、先ず読まなければならないものを知らねばならない。そして、ここには大学の書誌学研究所がある。世界中のあらゆる書誌学研究所と電信で繋がっている。だからこの大連絡網によると、十五世紀の漁業権についての本がコペンハーゲンで刊行されたのは、六時間も経っていないらしい。あなたは壁に掛かった絵画を見るように、この刊行物の概要を至急便で手に入るようになる。ご覧なさい。国際法の歴史家には二頁が充てられている。行政法の歴史家には一頁、国民の休日の起源には半頁、魚の移動には三行、物神崇拜には五つの言葉、そして民衆の歌の翻訳には六節の詩、それに興味があるなら文学史もあるが、取分け律動の歴史がある。隠喩の歴史もある。それらの出典は全てそこで、あなたが知っている書誌学者たちによってカードに登録されている。それらのカードは既に、私たちの処にある何百万枚ものカードに分類されているのだ。どんな専門家も一週間か二週間勉強すれば、興味ある作品の全ての題名を知ることが出来る、とあなたは言うことになる。この様にして誰もが、大建造物の貧しい労働者であっても、〈学問〉の中の小さな鄙びた分野の中でも勉強しているのである」。

私は彼に言いました、「それが新しい本を生んでいるのを私は良く知っていますが、それらの本は分析され分類されたりもしますし、読まなければならないものでもあります。そして、そこでの学問を全て身に付けるためには、強固で変わらない頭でなければならないことも私は良く知っています」。

セルヴレは私に言いました、「あなたはそんなことを考えているのか。それは野蛮な時代には可能だった。しかし今、全体としての社会科学を把握出来るのは誰なのか。今、身に付けることは、平凡な知識でさえも全てを知るのは不可能であることを理解しなさい。私たちは最早専門家でしかなく、専門家が専門家を育成しているのだ。現代の世紀はそれを認めているが、それは些細なことではない。人は最早冗舌家たちと見做さないだろう。彼らは全てを狙っているのだ。しかし、率直で注意深く忍耐強い探求者であり、自分の専門分野のことは全てを読んでからでないと一言も書けないのだ。〈歴史〉が作るのである。全てを含み、全てを調整し、全てを説明するのが〈歴史〉である」。

私は彼に言いました、「しかし、誰のためでしょうか」。

セルヴルは、恰も私が月から降りて来たかの如く、眼鏡を掛けた眼で私を見詰めました。私は彼に言いました、「私の質問は全く自然です。人間に係わることはどんなに小さなことでも、あなたが言う学問に起因します。でも、そうでなければならぬと誰が考えるのでしょうか。その様に判断するのは誰でしょうか」。

しかし、彼はインキのついた両手で怒ったような動作をして言いました、「立ち去れ、詭弁家よ」。私は又もや追い詰めて仕舞いました。

(一九一〇年五月三十日)

九十八 集団 (GROUPES)

国会議員の集団が一種の激しさで、目下寄り集まり形づくられています。集会の部屋が開かれるや否や、彼らは羊のように全員が飛び込んで来ますが、うなだれて頭を下げていると私は言いたいのです。少なくともそれは私が抱く印象です。もしもそれが本当なら、議会という大きな機械は、嘗てない程に個人をむさぼり食う準備をしていると結論付けなければなりません。

集団内のこれらの議論は、公開されることがありません。それは良いことではありません。代議士が言うことは全て有権者に理解されることが理想です。現在は伝統の強さをとっている制度と共にその中であって、政治の反発力は嘗てない程巧妙に隠されていますので、会議の公開が準備されてもまるでいんちきでいい加減です。

しかし考えるのを恐れることは、全く一人きりになり、有権者や委員会や友人から離れて、新しさに閉じ込められて、昔からの結束力が固い集団に顔面と脇腹を攻撃されて、自ら寄せ集めて統一されます。もしも言えるのであるなら、良く聞くように、既に伝統と原則と形式を持っているということです。新しさは、客間の中にいる農民のように、その中にあります。彼は直ぐに、人の言うことを聞けなくなるのを感じます。あるいはその場のしきたりを取り入れたとするなら、少なくとも何か価値あるものになります。歩き振りや言葉使い、そして新鮮みがなく身に付けたくないような意見、取分け最年少の者たちが賛成したいと思う意見の中にも、代議士になる一つの方法があります。それ故に、これらの新しい力は何と直ぐに砕かれ、捏ね回され、鍛えられることでしょう。私には頭があります。信じる処です。しかし本当は、もしも私が代議士になったなら、この世界の影響から如何にして逃れようか自問します。最初は殆ど話さないでいることを知るべきです。そして取分け、高い演壇から話をしない人々の言うことには耳を傾けないことです。

絶えず戦争状態にいる人々と一緒に理解するのは屢々、不可能であることを私は観察しました。彼らが社交的で寛大であればある程危険です。というのも少し活気がある性格の人は、批判に対して毛を逆立てて怒るからです。しかし、優しさや誠意に反対して何を行うのでしょうか。語り合う親切な人と同じ意見を持ちたいと思う人は、可能な限り最も強い人の一人です。誰もそれに抵抗しません。そして、もしも人が言うように自分自身を変えなかったとしたら、それは親切でしかありません。望ましいこととは、各々の代議士たちに説明することです。パリは議会に圧力を加えます。全ての中で有権者とは何でしょうか。それはペンで書くことです。そして比例代表制を如何にするのでしょうか。しかし私は、そのことは沢山言って来ました。いいえ、そのことはまだ言い足りません。

(一九一〇年七月六日)

平等と正義について自分で考えた観念が如何なるものかを、各人が言おうとして議論していました。それらの観念に基づいた行為に如何に従うことが出来るのか、眼鏡を掛けた或る詭弁家は発言しました。彼は言いました、「私はあなたにびっくりしている。あなたはまるで平等が不平等よりも合理的であったかのように考えている。あなたの論理が堅固で良く理解されているか、私は少しも調べないのだ。社会科学の観点で原因と条件を説明するもの、そして合理的な結果が説明するものの全てにあなたが気付けば、私は十分なのである。この国にも他の国にも、その様な不平等の制度、世襲の君主制、特権階級、司祭のコレージュ、その他にも同じ種類のものがあつた。これらの不平等が空から降りて来るとか、あるいは人に害を与えて何人かの個人が恣意的に制定したとするのを、あなたは支持しないだろうと私は考える。人は予め推測することが出来る。物事を研究して、当時は誰でも不平等が合理的で筋が通つた当然のことであつたと認めることが出来る。それは各々の時代にあつたこととして、既定の社会として、それ以前に生活していた方法と、現代の気候、工業、衛生、国の内外の安全保障の状況とを、同時に依存して生活する方法の一つである。これらの時代には、各々に正義があるのだ。それがその時代の本当の正義になる。聖職者や貴族や王たちの特権は、各時代にそうあらねばならないものであつたのだ。彼らはそうなつた原因と状況によって説明されるに違いないと私は理解している。そうでないと、学問は最早ないことになる。それにも拘わらず学問は存在している。それは最も可能なこと、各々の事物を益々良く説明しながら存在していることを示している。それ故に、決して存在しなかつた平等が、過去に存在したか今も存在している不平等よりも如何に合理的であるか、などと私は理解しない。どんな社会でも平等が存在する日が来れば、その時は平等が社会の中で合理的になるだろう」。

この話を聞き終わって、そこにいた人々は過ちの現場を押しえられた子供に似て、眼鏡を掛けた詭弁家に眩惑されていました。しかしながら、大きな怒りを裡に抱いていた一人の純真な男は別でした。自分自身で独り言を言いました、「何という奴隷根性だ。ジャン＝ジャック・ルソーやあなた方は皆、正義には寛大な友人たちで、あなた方は後継者である。今はこの人々が民衆に説教することである」。しかし、この呪いの言葉は一言も発言されませんでした。というのも理性的な人間は、理性には理性で対峙するからです。しかしもとうとう彼は、理性に溢れたような言葉をその場に言い捨てることになりました。

彼は詭弁家に言いました、「お笑い種だ。勿論、私はそれらの考え方が問題になる時は、心から笑ったりしない。そうだとも。全ては説明がつく。その意味で合理的であることを私たちは良く知っている。自動車がひっくり返るのは、少なくとも理解したいと思う目撃者でいる間は合理的なことである。しかし自動車の中にいる旅行者は、自動車が合理的に作られていて欲しいし、事故が起きては困るのだ。もっと正確に言うなら、自動車製作者は合理的な自動車の模範を追求する。つまり出来るだけひっくり返らない自動車である。最良の自動車を製造したい時、自動車製作者は力学に反することを何かするだろうか。反しない何かがあなたの理性にあるのである」

。この様に彼は語りました。しかし、この大雑把な比喻に人々は肩を上げて怪訝そうにしています。悲しいかな。彼に年間一万フランが与えられるや否や、学問も反動的になるのです。

(一九一〇年七月八日)

共和制のためにもものを書く時は全てに目覚めていなければならず、ある時はこちらで、又ある時はあちらで戦わなければなりません。拳を見せる人がいるのです。そして、これらの拳を見せる人々の中には指輪を嵌めたお金持ちの拳や、傷跡のある貧しい人々の拳もあります。その他の人々は理性的働きを示しますが、これらは最も恐るべきものです。というのも、もしも共和制が理性で築かれなかったなら、もしも理想でないとするなら、もしも理想がなかったとしたなら、その時は誰もが食べることに気を遣うからです。

或る詭弁家は私に言いました、「正義なんて言葉だけである。慣習しかないのだ。最も多くの人々の慣習が慣習になる限り、それが正義になるのだ。あなたもそれを否定出来ない。事実はあなたの思うようにならない。あなたは両親に敬意を払う。心の中が温和な老人である限り、あなたは両親を保障する。それが正義であるとあなたは言う。未開人は自分の父親を焼かせて、もっと若い肉体に父親の魂を宿らせるためにそれを食べる。それも正義であると彼は言う。共和制は正義である、とあなたが言うのも同じだ。別の人々は、君主制が正義であると言う。この私は、正義であるものとは一般に正しいと認められているものことであると言う。社会の中に継続した状態がある限りは、それ故に全てが正義になる。それ故にアランよ、私はあなたに忠告するが、そんなに主義を主張して熱くならないことだ」。

私たちは熱くならず、何処にでも転がっている議論と思われる、父親を食べる未開人の話を検証してみましょう。本の中に出てくるこの未開人を事実として考えてみましょう。証拠となるものは何でしょうか。正義や美德やそれと同種のことを全て生む観念は、私たちが今持っている観念とそんなにも違っていません。何故なら、もしも未開人が年老いた父親を食べるとすれば（何という柄の悪い子供でしょう）、彼にとって父親を食べることは嬉しくないからです。そのことを良く気を付けて考えてみて下さい。もしも食べるのが嬉しかったなら、あるいは食べる必要があったとしたら、彼にとっては最早具合が悪い行いではないと言うのでしょう。年老いた父親を食べるのは道理があるというのは、あなたが言うように、年老いた父親の魂にとっては今の老いぼれた肉体の中は居心地が悪く、彼自身の肉体の中に養老院を与えるためであるからです。ところで人間の美德というものは、そこに集められていると私は言います。何故なら理性によって行動しようとするからです。情熱からではないからです。そして、それが正義であり、称賛すべきものであると彼は言います。私たちも同じことを言います。この未開人は合理的なものを間違っていると少なくとも私たちは考えます。私たちはその合理的なものを彼に教えて、もしも少なくとも彼が持ち続けた正しい規程を、不正確に適用するとしても、程々の市民にすることは出来たと考えます。思想に従って行動することであり、空腹で行動するものではありません。

議論がめちやくちやになっているので、もう一度、父親を食べる未開人のことを良く考えてみましょう。この種の議論がおかしいとあなたは思いませんか。この未開人は何処で捕らえたのでしょうか。宣教師の話に合わせて私たちは、慣習を定めるようになるのではないのでしょうか。それらは、話から出た話でしかありません。事実を良く理解するために、精神だけでも強くしな

ければなりません。他人の眼を通してそれを理解するのは、愚かなことです。私たちが司祭を信用しないのは、他にも方法があるからです。それでは、司祭の精神は何でも信用しないようにしましょう。それ故に、私はその事実を否定します。

しかし私がその事実を認める時、その慣習が生まれたことが一度もない国で、これらの慣習を事実として持ち上げるために十分に力があるのは誰でしょうか。私たちは太った子牛を散歩させます。子牛を崇めているのである、と外国人は言って、結論を正しく下すでしょうか。我が国には売春宿があります。この奴隷制度を、私たちは自然で公平のように見ていると外国人は言って結論を下すのでしょうか。我が国には幾つもの決闘があります。お互いに戦う者たちは既に、神の裁きを受けているとあなたは結論を下すのでしょうか。いいえ、違います。私は、未開人についてのこれらの話は全て、お金持ちたちがお金を出している歴史家たちに任せます。そして、もしもお金持ちたちが阿片のように歴史を眠らせることがないように、落ち着いて自動車で走れないとしたなら、私は彼らに同情します。彼らは、望みもしない大変に高価な贅沢品にお金を出しているのです。

(一九一〇年六月十三日)

(次章へ続く)

潜水艦「雨月」(1)の新型を二度目に進水させるためには、又は海中から救出した船体であっても、将校同様に水兵も必要であると気付きます。もしも望むなら貴族たちも必要です。全員が尊敬に値します。一方に先見の明がなければ、もう一方は器用でなく、細心でもありません。全ての人々のやる気と信頼と心からの喜びが平等にあります。もしも許されることであるなら、彼らは沈んだり、再び浮上したり、遊び半分で商船の下を通ったかもしれません。

よろしい。ここで自分の人生を静かに危険に晒すこの裕福な将校のことを考えてみて下さい。お金持ちにかかる税金のことを話して下さい。彼は、自分の収入のうち少額を税金に充てています。その時は殆ど何時も元気でなくなります。彼は共通の利益を忘れます。自分の資本を外国人へ移すのを当然のこととして話します。それは良く考えると奇妙です。というのもあなたが外国人に潜水する船を注文するか自由に動かすことを要求する時は、何よりも強く要求します。そして同時に全てが上手く行くからです。そして外国人は躊躇しません。もっと正確に言うなら、彼は躊躇することさえ考えません。内面でも躊躇しません。彼に与えられた命令に対して、彼の裡では欲望もありません。見抜けるのに応じて、何処にいるのかも分からないこの船に足を踏み入れる時、彼は楽しくて仕方ありません。船体が水を裂き、外港でボートを踊らせる程、楽しいことはありません。緑色の海深く這入って行く時も又楽しいことです。全ての人々がその動きを愛します。更に規則正しい動きなら、もっと愛します。力強さを感じると同時に、この世の新しい眺望を感じさえすれば、新しく危険を伴う動きでももっと愛します。

それはルール化されたゲームの中にも見られます。最も乱暴な者でもその時は規律を愛します。最も柔弱な者は苦しみに慣れます。新鮮な幸福は大きく足で蹴ることや、大混雑の中にあります。それが危険を齎すものであっても、何か引き付ける力を感じます。速度には熱中させるものがあり、運転手を酔わせると良く言われています。それを喜ぶことは寧ろ、生き生きとした行動にある精神の正常さであると私は信じます。知性によって導かれて調整されて作られる力学によって、その時彼は完全に人間になります。

飛行士たちは恐らく、栄光とお金を求めています。お金よりも寧ろ栄光です。しかし私は間違えることも恐れず推測するのですが、飛行士たちがポプラよりも高く飛ぶ時、彼らが一番愛していることは、その行動そのものであるということです。彼らが隊長と一緒に何度も操縦する時、行動を共にする時、その行為は友情によって喜びが更に再び温められます。そこからデュマの三銃士たちは伝説化されるのです。

それは残された者たちが、心から尊敬する英雄たちを少なくするものでしょうか。全然違います。彼らがそうであるように、少なくとも人間的な彼らを見なければなりません。超人を見るのではありません。何時までも死者であってはなりません。そうして私たちは、小さな慎重さと小さな希望を残して置くことです。勿論、私たちの希望には、それとは反対に生きる者たちがおります。何故なら彼らは、今もこれからも、ずっと私たち自身にとって最良のものを保証しているからです。正義は何故、潜水することよりも難しいのでしょうか。

(一九一〇年六月十六日)

(1) 潜水艦「雨月」は、五月二七日にカレー沖で、貨物船との衝突後に、乗組員二八名と共に沈没した。

太くて白い首、若い犬のような歯、笑っている眼、頭は赤毛の巻き毛でマットレスのように厚くなった村の石工職人がおりました。平日は毎日石を築きます。日曜日には鋤を握ります。というのも彼の家の周りには庭があったからです。私は、この簡素で豊かな生活に感心しています。しかし、人は一言注意して反対します。彼は酒を飲みます。

彼は酒を飲みます。何時飲むのでしょうか。日曜日には嵌め込む切石もありません。石を積み上げて作業する足場もありません。それは家庭園芸という行為は、人生を充実させるためには十分でないことを証明しています。そうです、活気を生むことは難しいことです。そうです、活気は激しいものです。しかし行為は穏やかです。何時も同じ道ですが、征服されることはありません。それは老人たちに似合いです。その石工職人には退屈です。退屈ですから酒を飲みます。

私は、そこでは殆ど見知らぬ一人の住民のことを探究していることを白状します。赤毛の巻き毛をした頭の下は私には見えません。私の青い両眼はそこを考慮しません。それらの両眼は窓です。私のものではありません。しかし、それでもやはり次のことは断言出来ると思えます。男は、考えて工夫しないと退屈します。女はそうではないと私は思います。女は自分の豊かさをぼんやりと漠然と感じているように、判断力で彼女の外へそれらの豊かさを引き出したいと思うことはなく、自分自身でより良く生きているのであると私は思います。しかし男にとっては、思想の重さを自ら感じて、熟考や判断力によってその豊かさを外へ引き出したいのだと私は思います。

その石工職人は多分、そんなことは全て何も知りません。彼は只、退屈なだけです。退屈であることとは何であるか分かりませんが、何かをしたいと感じることであると私は推測します。ところで彼の頭もそうですが、思考したり判断したりするようになります。恐らく彼にもそのことははっきりと理解されます。多分、彼は自分の観念を開墾し始めますが、それは大変に困難なことです。あるいは遠い道のりであると感じざるを得ません。そんな大仕事に手を付けたいとは思いません。それ故に思考することを眠らせなくてはなりません。そのためにはアルコールが良いのです。

そのためにはまさに都合が良いのです。良く言われるようにアルコールは気分を変えます。私の知り合いの労働者は言っていました、「その日は誰もが興奮して危険で、満足の度を失っていると私は独り言を言い、私はもう眠れませんでした」。そのようになり出しますと、最後まで全力で走らなければならない、本も読まなければならない、勉強もしなければならない、実行しなければならない。もしも全て行わず、この観念の国へ行くための如何なる道も眼の前に見えないとするなら、その時はどんな代償を払っても、最早そのことを考えてはなりません。飲みましょう。善良な人間であればある程、アルコールを飲みますし、思考するための彼らの才能は最高であるのを私は見ました。この病人は、まさしく最良のものの際を窺っています。一番激しい酒飲みは、それを鎮めるための思考の火も持っている者です。それ故に、説教するやり方は貧弱です。地獄に落ちたこれらの人々は、世間を気にして良い評判を取るのを考えることは最早全く望ま

ないで、お酒の入った器に平凡な幸福を仕舞い込む人なのではないでしょうか。それでは自分自身を救出したことになるません。最良のことは、初めから思考するのを愛する方法であり、完全に人間的な生活を彼らに教えて作らせることです。少なくとも、それは大きな進展を齎します。もしも権力のある者たちが思考したなら、それは新しい世界を生みます。人は正義を信じる事が出来ますが、閑人たちには余りに骨が折れます。倫理や博愛精神は、それ自身で屢々恐怖になるだろうと私は理解しています。

(一九一〇年六月二十日)

君主教育というものがあります。教育とは、自覚して統治する者たちを、無知で服従する者たちから区別することを目的と見做していると私は理解します。私は、数学の教授を想像して思い出しています。彼は確かに知識を十分に持っていましたが、同僚の一人が、少し気が重くなる皮肉を言って打ちのめされている彼を、私は思い出します。彼は生まれつきの近眼でした。子供の頃には鼻先でしか物が見えませんでした。従って彼は、良く見るようにするために鼻をあちらこちらに向けて散歩していました。一つだけの視線に身も心も捧げて、両眼と鼻先の三角形を見ることが全てで、考えることなど出来ませんでした。鼻先よりも広くない全く小さな顔の上で行わなければならないのだと思います。この様にして全ての物をその三角形で発見し、幾つもの関係を把握して、その上で他の人と同様に考えることが出来ました。

しかし、そのことは大変に問題でした。人はそれを急がせました。彼は、その三角形の頂点から他の物へ走りますので、時間がかかるために話をしました。BのことでAのことを言いました。角度があっても直線であると言いましたので、おかしい話になっていました。私たちは、奴隷のように馬鹿にして、笑っていました。かくしてこの子供は馬鹿でしかない、と公然と言われました。何故なら近眼だったからです。

弱者を押し潰すのは全て政治制度によると説明されており、その中に私たちは既に殆ど巻き込まれています。教授は、群衆の中からエリートを選考し、そうでない者たちのやる気を無くさせて捨て去るのを仕事と見做しているように見えます。しかし私たちは民主主義の良さを信じています。何故なら、生まれや財産を考慮に入れずに選ぶからです。君主政治や専制政治というのは、コルベールとかラシーヌを選んで、何時もそんな風に行われて来ました。最高権力者によって民衆をそんな風に押し潰して来たことを考えて下さい。

私たちは今何になるのでしょうか。何かの天才とか、何人かの優れた才能の人々を選びます。私たちは、彼らの垢を落とすように教育します。検印を押し、安心出来るように結婚させ、人と同盟を結ぶ精神的貴族のエリートにして、平等の名で専制君主的に統治します。驚くべき平等で、既に多くのものを手にしている彼らに、全てを与えています。

私の考えでは、全く別のことを行う必要があります。全ての人々を教育することです。近視の者や精神的に愚鈍な者にも教えることです。怠惰な者を刺激して、眠っている者たちにはあらゆる価値に目覚めさせることです。理工科学学校の頂点まで確実に上り詰めるおしゃれな数学者よりも、十分な教育を受けていない農民の子供に大きな喜びを見せることです。それに倣って公権力を働かせることが、その下やその中で民衆を明るくするために使うようになるのです。平等から不平等な雰囲気を与える華麗にそそり立つ人や、人民から生まれた王を輝かせるのではありません。しかしこんなことを誰が考えるのでしょうか。社会主義者たちでも、はっきりとそんなことを心配していません。私は、彼らも専制君主に中毒になっていると思います。彼らも善き王を求めています。でも善き王は決していないのです。

私たちが楓やとねりこや楡の並木道を静かに歩いていた時、鳥たちの奇妙な鳴き声を聞きました。騒がしいと言うのではなく、決まった時間や季節にピーピー鳴くのではなく、苛々して攻撃的な鳴き声です。私たちの前を行ったり追いかけて来たりして、まるで私たちは鳥たちの殺し屋であるかの如くでした。親指のように太っていて、枝から枝へ飛んで私たちに近付く大胆な鳥たちは、熱心に私たちへ謂わば告白しているようにも見えました。殆どの鳥たちは鋭い鳴き声を上げ、ナイチンゲールは喉をごろごろと響かせて威圧的です。それは本当に熱狂的で戦闘的なざわめきでした。穏やかな木陰の下で、非常に興奮させていました。

この騒動の原因は私たちの足元にありました。それは、家を出てから私たちについて来た青味がかかった灰色の子猫以外にありませんでした。籠から出てきた時のように幼く、森の生活には未知で、鳥たちには啄み易かったのです。子猫は、幼い虎のように逃げます。その姿には威厳がありますが、ある時は不安そうで、草の上方を見ようとして立ち止まり、ある時は影や光と遊び、ある時は横に跳び上がります。要するに鳥たちの狂ったような騒ぎに関心がありません。しかしながら子猫はその音を聞きました。多分、子猫の尾の波のような動きから、鳥たちは巣から卵を取り出す蛇の動きを見ていたのだと分かります。でも王の冷淡さで事は運びませんでした。鳥たちの心配は全くの杞憂だったのです。

私たちは動物に何時も多くのことを考えすぎます。この鳥たちは、鳥を食べる者に非常に怒っているように見えました。鳥たちは子猫に接近して鳴き声を上げ、ものともしないで巣を遠くへ動かしたがっていたか、恐らく周囲に警報を鳴らしたかったように思えました。この子猫が行く道には常に奇妙な騒音がついていたのですが、それに反して鳥たちは少なくとも私たちに注意を払っていません。権力というものは叫びの航跡のように線が引かれています。結局鳥たちも猫も、長くそのことを良く考えませんでした。

同様に、人間も権力を喝采する時、長くそのことを良く考えません。敬意を表す時、権力には表しません。もしも権力が尊敬とか恐れであるとしても、それを少しも良く吟味しません。叫び声を上げる慣習が、鳥たちの慣習に大変に合っているのは本当のようです。それは多分、主人が近付いて来るのを知らせるためであるとか、大衆の力を十分に感じさせるためです。結局のところ、言葉ではないのですけれども絶叫することは敵対することです。人間は、何故鳥たちが叫んでいるのか良く知りません。もしも鳥たちがそのことを知っていたなら、何故要求しないのでしょうか。

(一九一〇年七月一日)

百五 三権分立（SÉPARATION DES POUVOIRS）

法務大臣が予審判事に自分の義務を思い出して欲しい、とある日私が思わず思った時、三権分立の昔の幽霊が私自身の前に出て来ました。幸いなことに私には、吟味する性分がありましたので、この三権分立の名称や起こりを調べてみると、三権そのものまで遡りました。それは教義に従った行政権、立法権、司法権です。

この分析が間違っているのは明白です。私は、ピエールとかポールを考慮に入れずに法律を作る議会を大変良く見分けます。でも、状況によってはピエールとかポールのために大臣は法律を適用したり、あるいは適用させられたりします。しかし、司法はどうでしょうか。それは権利なのででしょうか。もしも司法が権利であったなら、宗教裁判所判事は、何故公立小学校や試験やコンクールを認めるのでしょうか。それらも何故権利にならないのでしょうか。

本当は、司法権とは名ばかりで、国防措置とか公教育と良く似たものである国家機能を見せつけられます。非常に易々と二つとも見せつけられています。裁判官は、罰金とか何か月かの懲役を判決する時には、治安機能を行使します。幾つもの対立の中の自由意志のように、市民が彼に委ねるのを告げる時、彼は様々な機能を行使します。

私は隣人に更地を売却しますが、小道が通っています。隣人は小道を遮断したいと思いますが、もう一人の人は小道が通っていることを望みます。二人とも私の方を振り返ります。何故なら、その道は公道であったのか、そうでなかったのか、私が売る時に言わなかったからです。私自身はそのことについて何も知りません。以上のように何でも裁判になります。誠意が全てなのです。証人喚問や弁護の後に、裁判官はその道の通行権や売買契約のことを私たちに言います。裁判官の判決がどんなものであろうと、ここには被告も犯人もおりません。ここで刑を宣告する表現が使われるなら、それは言葉の濫用になります。現実には国家は、公認された自由意志をここで私に与えています。私は、他の訴訟人に同意して、他の人を選ぶことも出来ます。国家が公認した教授を私に充ててくれるのと全く同じやり方です。私はそれを国家の権力と理解しません。国家の機能と理解します。警察が監視する時と同様に、警察が判断したり禁じたりする時も同じで、別々の権力ではありません。

しかし、もっと適切に言うなら、三権の昔の理論では三番目の権力には無知だったのです。それは立法権でも行政権でもありません。それは検査権と言えます。実際に統治者の権威を失墜させるのはそれです。つまり統治者の権力が濫用される時に、大臣たちの助言者になるのです。その様にして実際の物事は決められて行きます。そこにあるのは慣習です。それは文書に書かれた〈法律〉として正確には未だ存在していないのですが、これから存在するようになるものです。

この例は、アンヴァリッド記念館の大砲と同様に、現代の海軍工廠の中に無用の〈原理〉を理路整然と幾つも保存されているのを理解させてくれます。空騒ぎや無駄骨を折るのと同じです。

（一九一〇年七月六日）

民主主義を定義しようとする良識ある精神を持った人々の何人かと私は知り合いです。私は屢々、そのことを研究しましたが、つまらないことの他に言うべきことはありません。おまけに厳しい批判にも抵抗しません。例えば民主主義を、権利及び負担の平等であると定義する者は、大変に間違っただけで定義していることになります。というのも私は、市民の中のこの平等を確保しているのは何らかの君主制であると理解しているからです。厳格で強い専制君主制を想像することも出来ますが、それは全てのことに権利及び負担の平等を維持しており、負担は全ての者にとって大変に重く、権利は大きく制限されています。例えば、もしも思考する自由が個人に存在しなかったなら、既に或る種の平等が存在しています。それ故に、民主主義は無政府主義であると言わねばなりません。ところで民主主義は法律や政府がなくても、つまり各人の自由に何らかの制限がなくても理解出来るとは思いません。その様な制度は、賢者にしか適していません。でも賢者とは誰のことでしょうか。

普通選挙であっても、決して民主主義を定義していません。絶対に過たずに責任のないローマ教皇が、普通選挙で選ばれる時、教会はそのことだけで民主主義でなくなります。暴君は普通選挙で選ぶことも出来ます。そのことによってやはり暴君はおります。重要なことは権力の始まりではありません。それは絶えず監視することです。管理されている者たちが、管理する者たちの監視を行うのが有効です。

これらの考察から私は、民主主義がそれだけでは決して存在しないと考えるようになりました。そして制度というものの中には君主制も寡頭制も民主制もありますが、多少なりとも均衡が取れていれば良いのであると私は信じています。

行政権は必然的に君主制になります。行為においては何時も人間が指揮しなければなりません。というのも行為は前もって取り決められないからです。行為とは戦闘のようなものです。その道の曲がり角の一つ一つで決断力が求められています。

立法権は恐らく行政を含みますし、必然的に寡頭制的になります。何故なら、何らかの組織を規定するには、学者とか法律家とか技術者が必要です。彼らは自分の専門分野で小さなグループを作って働くからです。社会が複雑になればなる程、この必然性は実感されることでしょう。例えば〈保険〉と〈共済組合〉を調べることを知らなければなりません。公正な税金を確立することも知らなければなりません。伝染病についての法律を制定することも知らなければなりません。

政治学が明確にしなかったこの第三の権力がないとするなら、民主主義は何処にあるのでしょうか。そして私が言う〈検査官〉とは何でしょうか。それは最大多数の利益に従って事が運ばれなかったなら、〈王〉や〈専門家〉を直ぐに廃すための、絶えず有効な権力以外の何ものでもありません。この権力は、革命や内乱によって長く行使されます。今日、それは議会での質問によって行使されます。この理屈で行くと、民主主義は権力濫用に対する永続的な管理に努力するものです。そして、健康な個人には栄養と排泄と生殖があります。均衡の取れた正義も、健康

な社会の中にあります。均衡の取れた正義には、君主制も寡頭制も民主主義もあるのです。

(一九一〇年七月十二日)

何度も話題になる鉄道員たちのストライキは、考えてみると曖昧なことの一つです。ストライキになるとお互いの人々の権利は尊重されなくてはならず、公権力によって守られなくてはならない、と大部分の市民は一致して言います。使用者が破産を判断して、巨額の給料を支払わない権利もあります。それは一般的に認められています。しかし労働者の立場として、その条件では給料が少ないと判断して、働かない権利もあります。何故なら、もしも労働者にこの権利がなかったなら、相関的に使用者の権利が専制君主的な力を持つようになるからです。資本を与えている者は使用者です。労働を供給する者は奴隷です。奴隷であること、そんなことは認めることが出来ません。政治的な力は、自由意志の儘でなければなりません。貧乏人が強く要求出来るのは最小限です。従って鉄道員たちのストライキは権利に適合しています。もしも政府が力尽くで働かせたとしたなら、それはお金持ちが気に入っているクーデターになります。

よろしい。勿論、幾つかの権利要求の声は上がります。何故なら、その他の権利がその時危うくなっているのが分かるからです。旅行者や商人は、私には旅行する権利とか定価を支払って鉄道で商品を発送する権利がある、と言います。もしも鉄道員たちがストライキを打ったなら、私の権利はどうなるのでしょうか。ここでは〈権利〉の言葉の洒落が言われています。市民には、私の、と言う言葉の背後にある権利を、口に出して言うのも権利であるのは明白です。しかし、お金を儲けるために人足を強く要求する権利があるのでしょうか。無いのは明白です。同じ理屈で言うなら、お金のために蒸気機関車や客車を要求する権利はありません。一市民が求めるもの、供給するもの、それらは赤帽とか運送業者と契約を結ぶ以外にはありません。彼はその時、契約によって限定された権利を持ちます。しかし、彼との契約の履行を果たせる運送業者はストライキのため一人もおりません。

勿論、旅行者が交通機関との契約をしていること、例えば鉄道の切符を持っていて、遮るもの一つない平地に取り残されていると想定してみましよう。彼には払い戻す権利があります。賠償させる権利さえもありますが、肉体的な苦勞をしてまで移動させることはありません。もしも政府が機関士や運転手や転轍士を監獄や強制収容所への監禁で脅したなら、その間は旅行者の権利を守ることになるかもしれません。ところが私たちは一般的に、権利を手に入れるという考えでは全てが上手く行きません。あなたは私に、インゲン豆を売ったとします。その後、それらのインゲン豆を私に引き渡すことが出来なかったり、引き渡すのを望まなくなったとしたら、あなたはお金の支払いを強制されますが、肉体的には如何なる強制も課せられません。

大変に結構だ、と人は言います。しかし、鉄道員は肉体労働の約束をしましたが、強制的にこの労働を行わせることは出来ません。肉体への強制を前提にするのは誰でしょうか。それに私は答えます。もしも鉄道員が、大変に給料が少ないと判断しても強制的に働かす権利があなたにあるとするなら、その会社が高いと判断している給料を強制的に鉄道員へ払わせる権利もあなたにある筈です。列車が停止している時、あなたは鉄道員たちがストライキをしている、と言います。でもストライキをしているのは、会社の株主たちであると何故言わないのでしょうか。

(一九一〇年七月二三日)

タキトゥスの本を読んで、私は二つの恐ろしいことにぞっとしました。一人の皇帝や寵臣の殺人が問題ではありません。それらの宮廷の悲劇は、私を少しも感動させません。彼らは狂った野心であり快樂でした。私を怖がらせたのは、極悪人とか狂人があちらこちらにいたことではありません。彼らは、民衆まで狂人にするものではありません。彼らのような人物は、何時の時代にも見られます。それは何時もの残酷さであり、狂気の沙汰に理屈と規律が与えられるようなものです。

その時代のアフリカの戦争においてあったことは、今日でもなお小競り合いや不意打ちとなって存在していますが、ローマ軍団の戦は下手でした。ローマ軍の将軍は古い戦法で戦いました。ローマ軍の一団は大量に殺されました。つまり十人に一人が殺されました。その運命にあった者たちは、棍棒で殺されたのです。フロベールが『サランボー』で彼らのことを書いていないので、私はびっくりしました。この作品をフロベールは気に入っていました。しかし、その場面が書かれることは多分あり得ませんでした。力の濫用で全てが分かるまでになります。それではこの本では何処にあるのでしょうか。同じ軍団の中にあります。この作品からその運命が理解されるのでしょうか。そして武装した兵士たちの中央にいる将軍は、誰が残忍な者で、誰が犠牲者かまだ知らないのでしょうか。勿論、悪魔のような用心深さをそこに見なければなりません。何故なら、運命を引き寄せられる限りに武装した兵士たちには、残忍な期待を込めて武器を手にして、彼らの両手に保持されているやり方に全てが従うという考えを持っているからです。そして運命が分かって来ると、急激な変化から避けられなくなります。十人に九人は命が助かりました。でも十人目の人の反逆が、全てを分からなくしました。棍棒の時代も同じです。マキャベリは、この恥ずべき感情を理解し解明しました。そしてその見解は少なくとも、それらの感情を感じる者たちよりも、それらを解明する者を許すものでした。そこには人間の深淵があります。

当時には他の慣習もありました。或る大陰謀家が弾劾された時には、彼の奴隷たちを拷問にかける方法も採られました。そして奴隷たちは自分の主人のことは何も言わずに、やっどこや火で殺されたのであり、一人ならず多くの元老院議員は奴隷たちの精神力で救われたのである、と歴史家は言います。ここには既に知性は無く、もう一つの道の中でした。というのも奴隷たちは最も弱い者であったからです。そして彼らが受けた拷問は、それが望まれるや否や一巻の終わりでした。全く如何なる真実が期待出来るのでしょうか。奴隷たちが自由に主人のことを話したとしても、そこにいる人間は少なくとも聞こうとしなかったのです。勿論、苦痛に狂ったならば、彼らの叫び声は証拠になりました。それ故に真実は汗や涙や血液のように出て来ると人は考えたのでしょうか。それ故に妄想の中の本当のイメージが君主であり、その後には想像もつかない完全な破壊があり、全ての利欲が取り除かれ、全ての希望は人間が最早海綿のように押し出される記憶しかないと言ったのでしょうか。恐らくそれは、騎士に裏切られた苦悩が奴隷に真実を言わせた体験を通して、彼らは分かったのです。多分、一種の恐ろしい外科を生業としながら教わったことは、適度な苦悩は嘘をつかせるものであり、本能が語るのを望むならば先ずは知性

を殺さなければならないことです。あるいは多分、それは全く単純な野獣のような人間になることでした。そしてタキトゥス自身は、例え少しの感動も無くこれらのことを語るにしても、野獣のような人間とは如何なる者だったのでしょうか。多分、私たちは殺人話を犯罪と見做すようになり、歴史を削除するようになるでしょう。何故なら、歴史は政治家を正当化する学校であると良く言われているからであり、全くその通りです。

(一九一〇年八月十日)

大変容易にピストルで遊ぶ人々がいる、と最近良く言われて来ました。そこには多くの狂気の沙汰があります。私が理解する狂気は平凡なものです。私たちは誰でも小さな狂気の種子を持っています。火器は危険な仲間で、私たちの下心を進んで変えます。ピストルには何があるのでしょうか。そこには爆発性が非常に強い火薬があり、鋼鉄の銃身の奥には弾丸があります。沢山の労働者が鋼鉄を回転させました。何回も焼いたり混合したりして濃縮した火薬玉を作ります。その均衡は全てが不安定で、まるで坂の上の岩のようです。指の動きだけで火薬の成分を全て調べます。原子がひっくり返されるように開始されるのを待つだけで、大変に早く休息に戻ります。巨大な熱量を小さな空間に上手く閉じ込めて自由にします。それを全て粘り強く柔軟な鋼鉄の中で、一つの方向へ導いて行くのです。全てが管理され、抑え難く、後戻りは出来ません。それは教育され、目隠しされ、訓練された意志のようです。しかし決して意志を持たない者たち向きなのです。

そして全てが眼に見えません。全てが非常に明確で、上手く完成し、明らかに静止して休息しているこの鋼鉄の中で眠っています。誰もがそれにひっかかります。その武器を利用する人々でさえもひっかかります。そこから突然に愚かになります。何故なら惰性から行為へ移行するのを忍従し、想像力は何も出来ないからです。唸る犬は恐れられます。蠅を捕りに行く平和そうな蟪蛄に夫人の心は跳び上がります。しかしピストルを持っていても、脅して遠ざけることは出来ません。ピストルの弾丸が当たってパチツと言う時、炎を上げる時、手の中で怒る時、既に事は終わっています。

私は昨日、自分の隣人に余り満足していなかったお婆さんを見ていました。彼女は、荷馬車の立てる音が五月蠅い道で、大声で話をしていました。彼女の身振りは全てが脅かしでした。脅かし以上のものでさえありました。何故なら、身振りというものは行為でもあるからです。

少なくとも隣人は眼に見えない処にいました。殴り合いが始まらないことは誰が見ても分かりました。多くの騒音は何でもありません。身振りは乱暴ですが自制が働いています。何故でしょうか。何故なら誰もが拳骨を作ろうとしていてその一撃を想像するからです。その意志は突進しますが急に止まります。その一撃に遭ったとしても、予想したことにはならないでしょう。拳骨を止めて平手で打つように長い間訓練しなければなりません。同様に、ナイフも上手に刺すことを覚えます。もしも悪の天才が伸ばした拳骨の後で、長いナイフを突然に使えば、通りは血だらけです。もしもその悪人が人を殺したかったなら、犯罪になります。しかし、まさしく怒りは脅しで弱まります。力は、その反動の働きで力を見付けます。もしもあなたが拳骨で殴れば、拳骨も痛みを感じます。

勿論、ピストルに手を掛ければ、惨劇は直ぐに終わります。一種の奇跡が起こります。怒りという最初の衝動は殺されます。その後で、殺人者は大成功に打ちひしがれているようです。奴隷なら大変に上手く従うでしょう。人はエリートとしての問題を認めます。ここには類似の問題があります。私が撃った時には、その銃の力には何時もびっくりさせられます。私はお守りを試す

ように、私の武器を試しました。私は殺したいのでしょうか。私は寧ろ殺すことが出来たのかどうかを理解したかったのです。その若い犯人がその人間を撃った時、悪意と同じ位の好奇心が無かったかどうか、私には分かりません。私としては、そのことが良く分かった時は最早その追撃が好きでなくなりました。もしも私がその若者を教育するのでしたら、あらゆる武器に親しませたいと思います。その機械と化学を理解させたいと思います。彼に訓練させて、弾丸の力を想像し、知ることを学ばせたいと思います。誰もが、危険を冒すことで、なりたいものを行います。しかし、誰もが行うことを覚悟するのです。

(一九一〇年八月二三日)

私は先日、或る学者が月の運行と出来事が起きる時刻との間に通常生まれる関連を、軽蔑すべき盲信と見做しているのを知りました。確かに彼のその判断には多くの間違いが何時の間にか忍び込みます。例えば太陰月だけしかなかった時代には、新しい月とは程遠いものです。最も平凡な観察でも、この法則は想像力によるものであると理解されますし、今でも月は私たちの生活の中に存在しています。

もしも私が、古代にもあった間違いの始まりを見付けたいと思うなら、注意すべきことは古くから年が月に分割されていた点です。そのことは理解出来ます。何故なら月の姿は変化しますが、規則正しく変化するからです。三日月は西に向かい、その姿は星々の中に浮かんで丸くなり、ついに三日月は最後には東へ向かい、想像力が働いて幾つもの出来事が整理されて行きますが、多少なりとも月によって始まり照らされて行くからです。恐らくそこから齎されるのが、雨や天気についての古い物語が月に分割されて行きました。一月の月は雪のもの、三月の月は雨のもの、花々の命を奪うのは四月の月、干し草に良いのは六月の月と言われています。その他にも物語があります。それは自然なことであり、無知な人々が精神の率直さによって多いに文字に精通することは、まるで各太陰月がその時代にあったかのようです。そしてついには月の変化に、時代の変化を期待するようになりました。記憶は、既定どおりに理解されるものしか考慮しないで書かれたものと、何よりも異なります。除外したものは忘却されます。

さて、私は時代と月の動きに何があるか自問します。それは不可解ではありません。潮があるように、つまり月の動きに従って海水が高くなります。その様に大波も恐らく環境によるのであり、それは月の影響でもあります。そして当然のこととして、空気という波の稜線の前後には低気圧があります。ところがこの低気圧には稀に空気がそれ自身により冷たくなり、雲や雨になって凝縮することが良くあります。

この様にして、その他にも四季、風、気候の全ての原因になります。その点を大袈裟な話にしなから、大雑把に言うなら日々の月の運行においては一日よりも少し長くかかります。雲の行列のように前へ前進して行きますが、後ろが残りもします。しかし、月があると何時も大空は相対的に澄んで静かです。そのことは注目すべきことです。混乱の時代の時でさえ、時々月はじっくりと見ることです。そしてこの太陰月は、その良い例です。

もう少し良く考えてみましょう。月が新しくなるとは何でしょうか。それは月が太陽と同行することです。私の仮説に従えば、最良の時間は日中の時間です。そこから結論を下せることは、その時間に雨の前兆があれば、況んや他の時間には雨になるということです。そして私が間違っ話しても、真実の始まりがそこにはあります。しかし優しい月よ、ごめんなさい。学者ぶる人を許して下さい。

(一九一〇年八月二八日)

(次章へ続く)

聖父のローマ教皇は、道徳に関しては良くない教授です。彼は全てを混乱させます。不平等であっても不公平とは言いません。大変に頑強な人間のことを話しても不公平とは言いません。何故なら大変に頑強な人間であるからです。大変に頭の良い人間も不公平とは言いません。何故なら大変に頭が良いからです。もっと適切に言うなら、もしもボクサーがルールに従って殴ったとしても、強く殴ったボクサーは不公平として告発されません。同様に、ブリッジをして遊ぶ人は、ルールに従って遊んでいれば、人よりも沢山勝っても不公平とは言われません。そして、もしも全くルールが無かったなら、正確に表現することはなく、言外に暗示することもなく、最早不公平もありません。力しかないのです。そして力のゲームにおいては、公平も不公平もありません。このことを熱心に考えたなら、非常に簡潔な考察であっても、もっと多くの困難なことが明らかになるでしょう。というのも、力を正当化したいと思われた思想家には枚挙に遑なく、その最も高貴な人々から選ぶとするならスピノザやブルードンがいるからですが、〈正当化する〉という言葉は相応しくありません。力は確立されます。そして不足するものは何もありません。それは確立されます。それ故に、その様な力は不公平ではないと言わなければなりません。

しかし、それが公平であると言うのは特に気を付けなければなりません。それは決して正しくありません。ジャン＝ジャック・ルソーは、ピストルには理性がないと良く言っております。狼が子羊にかぶり付く時、それは公平ではありませんが、不公平でもありません。不公平なのは、その話をする事で不公平になります。それ故に、私たちが不公平であると判断を下したものを、公平になるように彼は強く望んでいます。この狼は、他の生き物を食べるのは力を持つためではありません。食べる権利を持っているためであると主張します。彼は賛同されたいと思います。そこでの彼は、自由意志の力に自分を置きます。道徳の力に自分を置きます。それは何時も子羊が食べられる力によるものです。決して強かったり弱かったりするものによるものではありません。まさしく食べられるか、そうでないかです。従って世界中の力は、全てが公平か不公平かで決められておりません。それを決めるのは理性です。

さて、この公平は何からなっているのでしょうか。例に戻らなければなりません。ボクサーは不公平です。何故ならルールに従っていますが、勝つことを熱望するからです。そして同時に、そのルールも犯すからです。もしも知的な遊戯者がいんちきをすれば、彼は不公平です。他には許されていない権利として我が物としないとしても、いんちきはいんちきです。従って、公平は何時も全ての人に共通のルールを前提にしていること、つまり或る類似性に基づいた平等として認められている平等であると言わなければなりません。それは何時も絶対的なものです。そのボクサーが少しでもルールに違反するや否や、彼は全てが不公平になります。公平を定めた平等は、それ故に実際には平等でなくなりますが、平等は前提としてあります。それは望まれてもいます。子供はボンボンを買いたいと思います。子供の弱さと、商人の強さが契約に介入して来ない状態なら、その交換は公平です。その場合、その力が最も小さく働く時は不公平になります。

。何故でしょうか。何故ならその商人は商人であって、泥棒ではないからです。要するに公平は、複数の人々に共通したルールを前提にしております。その意味で平等なのです。そして不公平を定義するものは、決して単一で純然とした不平等ではありません。多くの不平等は、強者として忍従することに満足せずに、何時も公平なものとして崇められることを強く望んでいます。それは〈教会〉にあっても欲しいものとしての道徳の力に相応しいものであり、最も強いものからなるその偽善的態度を告発するにも相応しいものでした。しかし、カトリックの枢機卿たちは何も理解していません。

(一九一〇年九月一日)

二十回は読まなければならない奥深い本である『パルムの僧院』は、司教になるための道の途中で、多くの狂気の沙汰を行う貴族である主人公ファブリスを私たちに見せています。それ故に、それは純真な人間を騙したい偽善的作品なののでしょうか。いいえ、全然違います。ファブリスには素朴な人としての信念があります。彼は、異端を避けるために教える神学の先生に報います。もしも嘘をついたり、邪な恋をしたなら、小さな子供のように咎められるでしょうが、政治的陰謀や虚栄心の強い老人への阿諛から、司教になることを望むのは罪ではないかどうか、彼は一度も自問しません。あらゆることに彼は完全に自分自身に率直です。夢中になり易く、勇気があり、友人たちに誠実で、義務であるかのように慈悲深いのです。この驚異的な描写は、カトリックの世紀の時代であることを明らかにしています。

本当の貴族になるためには、体力や戦闘の技術があるだけでは不十分です。それに相応しい深い知識も必要です。それらが全て彼になくてはならないのは間違いないのですが、難しいことです。それは精神を生き生きと働かすことです。そして行動の原理に最も小さな明かりを点けることも、彼にはない奇妙な精神です。そこにはイエズス会教育の勝利があります。それは礼儀正しい精神であり、肉体の魅力と同様に本質的なものです。ハムレットは悪い王子です。何故なら頭の理解力についてじっくり考えないからです。それは決してまともなことではありません。従って、決して礼儀正しいことではありません。「修道院よ、修道院よ」。そして彼がポロニウスの阿諛を嘲笑する時、人がおべっか使いを嘲笑することは決してありません。それは仕事を台無しにするからです。ファブリスは単に、ポロニウスが退屈してただけだと判断します。でも決して彼に分からせようとしません。神も天国も地獄も信仰も、儀式なのです。「トランプ遊びのホイストのルールには誰も異議を唱えません」。

法律も儀式です。柏やポプラの木があるように、お金持ちも貧乏人もおります。あなたは、ポプラが決して柏ではないから、ポプラの木を気の毒に思いますか。それは優しいことも変わりありません。というのも慈善も儀式であるからです。決してポプラの木によって安楽椅子は生まれません。従って死刑執行人は、何度も土百姓を絞首刑にしたり公爵の首を斬りますが、人間そのものをあるが儘に倣って論じなければなりません。何故なら、それらは全てが儀式のものであるからです。しかし、土百姓の権利は公爵よりも少ないのではないのか、そして何故なのかと怪しむこと、平民であるからかと怪しむことは軽率この上なく、それは不作法です。そこにあるのは真の連隊長の精神です。その精神が連隊長を生みました。そうあらねばならないのが良いのです。正しいのです。何時もそれらの違いを見て行く連隊長は、絶対的です。そういう訳で神を信じなければなりません。

この精神は死にません。私は伝道者のように言うのですが、私たちは神の中で動き回って存在しています。良く調べてみても、決してお金持ちになれません。良く調べてみても、犬小屋よりも居心地の悪い洞窟に、試しに泊ってみたなら、哀れな人々の家の中へ敢えて這入って行きません。良く調べてみても、石灰の煙だらけの郊外の町を敢えて選んで車で通り抜けたたりしません

。しかし、最後まで良く考える人々が少しはいます。何時も敏感な点がありますが、それを強調したりしません。病院で現れるその幻覚を崇めます。しかし眠りの中で現れて来た人物の一人がこの世にいないのを証明された時、目覚めてからは最早その人を眼にすることもありません。しかしそれでも、決して傷付いたり単に軽く触れることもないように取り繕います。この奇妙な状態はそれでも人間のものです。高い教育を受けていたとしても、少なくとも危険から免れない思考があります。良く理解して下さい。人は財産を貧しい人々へ与えたり、神の愛のためにカルトジオ会の修道士になったりすることが出来ます。しかし、貧しい人々が絶対的に幾つも権利を持ち、財産が与えられるにしろ、それらが保持されるにしろ、それが平民です。力は良く正当化されなければならなかった、とパスカルは言いました。この人間は悪魔のようでした。神はこれらの思想を支えなければなりませんでした。そして、ローマ教皇はそのことを何回も言うのでした。

(一九一〇年九月四日)

著名なカントを学者ぶる人々はおかしな人物として描いていましたが、カントはジャン=ジャック・ルソーのことを凡そ次のように言いました、「私がルソーの本を読んだ時、最高の感動を抱いて判断することが出来なくなりました。何回も読んでルソーに慣れるように専念しましたが、私には全く先生がおりませんでした」。この考えは、驚異的な思想の創造者のものです。如何なる思想家もその能力を測ることは出来ませんでした。この天才は、ジャン=ジャック・ルソーの本をたどたどしく読みました。それでもジャン=ジャックが申し分なく褒められていないことを理解するには十分です。

そこにはジャン=ジャックに対する嫌悪があり、非常に長く続きました。この嫌悪は、アカデミー・フランセーズを良く定義しています。文芸の先生方は、カントが雄弁術教師で詭弁家でしかなく、狂死したのだと私に示しました。文学の下僕となった現代の人々は全てがジャン=ジャックを殺して、生活の質を得ています。歴史家も〈社会契約〉を無視し始めたなら、パンを手に入れられません。この嫌悪は理解出来ます。それは殆ど正当であると私は言います。ルソーは自由な人間だったのです。

糊口を凌ぐために人はものを書きます。橋を造るように糊口を凌ぐために人は思考します。最初は小僧でしたが、文字の綴りや模倣文を覚えるや否や、どうすれば人から好かれるのかを自問します。一冊の本は何時も小舟です。皇帝とその財産を運んでいます。そのことはアカデミー・フランセーズの人々には当然のこととされていました。彼らは最良の船頭に賞を与えます。

何であろうと若い人々が才能を手に入れる時、彼らは死ぬまで次から次へと書き直して清書する小さな才能を生むことになります。それは宮廷人であり、人間の亡霊です。熱血に飢えた死者の霊を呼び起こすユリシーズの饗宴のように、その後を彼らは走って来ます。余りに遅いです。最初は奴隷です。成功はその次です。その後は自由な人生と心の祭りです。そして正直に言って保養を手に入れますが、それらは裏返しになった人生です。アキレウスの亡霊は虚しく次のように言いました、「私はアキレウスの亡霊よりも、生きた豚の番人の方を愛する」。彼らのうち最も優れた者も恐らく次のように言います、「アカデミー会員の才能よりも、放浪して迫害されたジャン=ジャックになる方を私は愛する」。私はもっと後であなたに言います。あなたは思想を生む前にもものを書きました。それは救いようのない間違いです。

ジャン=ジャックはレ・シャルメットの村で、本を読むために読み、思考するために思考しました。偉大な人間たちに大変素直になっても、殆ど理解しなかったならば、彼はその偉大な人間たちのものを写しました。目的もなく思想もなければ、線を引く必要はありませんでした。失われた時間も同じです。夢には形がありません。そして散歩の時には急流に小石を投げます。彼の思想が如何に成熟して行き、如何にしてそれを書く力を感じ、書いたものを何回後悔したかが分かります。『新エロイズ』の初版本が売れずに財を成さなくても、本屋が褒めているのを読んだ時、現代の作家の卵たちはそのことを信じません。彼らには無料という考えはありません。それがもっと長く続けばスキャンダルになります。ディドロは何時も中傷します。そしてその偉大

な人物の影で吠えているのがグリムです。恐れてはなりません。種属は死にました。精神の働きは適切に分割され、規則正しくなります。各人が小さな断片である社会学者、モラリスト、政治家、詩人、劇作家となって磨きをかけます。各人が小さな断片となって離されて、自分の小さな空間で磨きをかけるのであり、それが思想と言われています。そして誰も集まって一つになりません。おゝ、一つにする規律とは、軍隊の力なのです。

(一九一〇年九月九日)

誰もが利益を追いかけるとするのは、月並みな思想です。いや寧ろ最良であるとさえ言いましょう。誰もが自分の情熱を追いかけていると言いましょう。恐らく自分だけの理由には正しいものは何もないのです。自分のものが大事になると、多分腐敗しないものは何もありません。先ずはそのことを良く理解しなければなりません。大衆の些細な混乱にびっくりしないようにしなければなりません。それが行動する人生です。私たちを動かすのに理由は要りません。それが充実した人生であり、豊かな生命です。多分、義務によって行動する人もおりますが、彼らは冷静に判断を下して行います。それらは賢い人々です。そして何時も彼らは、余りに齢を取っていることに気付かなければなりません。いずれにしても彼らの人数は多くありません。陰鬱な人生です。実際に人生は、騒然と叫び声を上げて河のようにあらゆる処を流れます。私は通りの一隅を見直します。乗合馬車の前を小さな馬車が、花を一杯にして逃げるようにして行きます。刃物の研ぎ師や菓子屋や急いでいる多くの人々がおります。白粉を塗った女たちがおり、我が儘な子供たちがおります。警官は、海の神のようにこの河を泳ぎながら前進します。商人たちの金切り声がしています。何か物を売っており、彼らは味覚や臭覚を楽しませてくれます。ちらしを背負って、剃刀用クリームはどれも質が悪く、Xのものをかうように言っている男がおります。儲ける欲望、食べる欲望、あらゆる欲望が群衆をあらゆる方向へ放ちます。官憲が棒を上げます。花屋は神々に証人になって貰います。水が流れるように何時ものことです。時間が空しく過ぎて行きました。商人、奴隷、売春婦、放蕩者、美食家、親衛隊員たちの時間です。私は、ローマ皇帝の時代のローマにいます。そして、ここでは偉大であったりつまらなかつたりする皇帝しか見ませんが、彼らは力や脅しやお金で支配します。その上で御者は、全ての大地を罵るように走っています。

私は人間のエンジンを忘れています。それは長い時間全てを引きずり、全てを助けていますし、これからも助けるでしょう。それは〈好奇心〉です。その両眼は貪欲です。見て、判断し、思考します。そこには人間がおります。すべきことは最早ありません。あらゆる所を見て、自発的意志があり、公正さがあります。皇帝たちはどんちゃん騒ぎの遊びで、この見詰めることへの激しい思いを一時的に紛らしました。それはパンと見世物です。パンは戦争の備えになり、見世物は正義を育てました。誰もが物事と人物をありありと思い描きます。真の絵画の中では自分を見失います。そこでは次第に考えたこともない本当の町が造られます。誰もが自分のことを考えると公正に判断出来ませんが、見世物を見るように他人のことを考えると公正になります。この様にして他人の理性で私たちの情熱を見ることです。見物人は立法者です。見世物は力強い業で生成します。わめいているのはあの警官です。

(一九一〇年九月十二日)

社会の喜びは生き生きしていることです。社会の悲しみは耐えられません。社会の喜びとは、意見の交換であり、皆で感動し、皆で笑うことであると私は思っています。皆で涙を流すこと、優しさ、尊敬、讃辞、真心もそうであると思います。社会の悲しみとは、屈辱、軽蔑されること、尊大又は横柄であり、激しく口論することであり、非難することであると私は理解しています。それらは結局幾つもの不安を生むこととなります。何故なら孤独は、最悪なことであると思うからですが、あるいは見方によっては最良のことであるとも言えます。

私欲は、社会の喜びを問題にしません。あなたが請願者の請願を叶えさせるや否や、それがお金や地位や勲章であるなら、退屈して来ます。あくどい便乗者の昼食もあり、そこには誰もが自分の仕事や希望を平凡なものにして仕舞う移行を招きます。そうでない他の者たちは、食後のコーヒーの時間になると椅子をあちらこちらに移して、或る一隅を批評家、出版者、出資者、アカデミー会員、代議士で塞ぎます。私は、両者のうちどちらかに臆面もなく質問している者と顔見知りでした。「私は、お金になる演劇欄を書こうと努めています。誰か私の役に立つ人を知りませんか」。別の人々は小さな声で話しています、「大変に頭が良くて教養がある男性が要求するのは、楽しい仕事で報酬も十分です」。この様な人は料理に毒を盛ります。親切そうな人間を信用してはいけません。彼は習慣から役に立とうとします。例えばあなたの船上に転落防止の板を張りますが、それは恐ろしい罠です。というのも上品に断るべきであるからです。勿論、どんなやり方でも断って下さい。

外部に興味を移した時、その時には観念がやって来ます。説教でなく、講演でもなく、観念です。全ての人に観念があります。自分のことを考えるのではなく、対象を考える時に観念が生まれます。しかし観念のことを考えるや否や、最早観念はありません。別な言い方をすれば、観念とは、そのことを考え出す時にしか観念になりません。もしもそのことを語れば、最早何ものでもなくなります。その上、観念を暗誦する理由が慎重さとか野心からでないとするなら、あるいは臆病からであるのです。それは私たちが規範に帰着させます。ドアの処には幾つもの興味を、その儘にして置かなければなりません。

会話にはそれ故に、多くの率直さがなければなりません。しかし、その様にして理解したゲームは既に危険です。守るべき節度はあります。井戸から水を汲むように、傑出した人物の思想を屢々取り出さなければなりませんし、聞かなければなりません。議論はしなければなりません。何処までするのでしょうか。激しい嵐のような議論で台無しになった貴重な会談を私は見ました。もしも人間が、少なくともこの突然の嵐を予測するのを自分の任務としたなら、彼は社会の中で大変に幸福になることが出来ますし、引っ張りだこになり、そして高く評価されます。要するに、光を放出するためには、それらの嵐を愛さなければなりません。それらの全ての中で最高の規範は何処にあるのでしょうか。勉強したいと思うこと、一緒に考えたいと思うこと、遮二無二他人を理解すること、一つの物を作るために働くことである、と私は言います。他人をそこで働かすことであり、そのことしか考えないことであり、自分自身のことは考えないことです。

。その様にして本当の優しさの奥深さを知ります。「あなたはそれを愛していますか。恐れていますか。何を期待していますか」。これらの話は動物たちのゲームです。人間の質問は、何でも構わないのですが、次のとおりです。「それは何ですか」。

(一九一〇年九月二三日)

夜の十時頃、東の空には寒そうな昴（すばる）が見えます。その上方の南寄りには土星がやって来ていますが、どちらかというところど星々の間に取り残されて私たちに再発見されるようなものです。それというのもこの惑星はゆっくりしているからです。しかし、火星を見付けようとしても無駄です。この季節に土星の前を歩くようにして火星が行ったのは、昨年だったからです。火星の周期は、大旅行をする土星よりも全然小さいです。今の火星は、太陽と同時に大空を回っています。

これらのことが説明される度にそれを聞く者は、若者も老人も嬉しそうにします。もしも今、あなたが或る数学教授に尋ねても、宇宙形態説は生徒たちが習っていない科学であると彼が言うのを私は確信します。でもそれは夢を見せてくれます。天文学は、科学や自然のABCであり、第一歩です。そこでは人間はその法則を把握することです。そこでは力学理論が大変に素晴らしい応用を発見します。科学の大きな扉です。有用性の最初の素描がそこに見えます。あらゆるものに敏感な眼になります。しかし、星々が回転しているのを少なくとも知っているバカロレア合格者は何人いるのでしょうか。

そのことを知らない原因は二つあると思います。一つは大空の現象を、大変早い時期から子供に見せなくなっていることです。十歳から十五歳の間に、子供たちは何をしているのでしょうか。彼らは文法を繰り返して言い、蠅を追いかけます。でも太陽や星々や月の観察の初めは、全く手の届く処のものです。器具も必要ありません。大地にしっかり杖を立てれば、大変に正確な日時計になります。厚紙を管にして、星々の動きを大変良く把握していました。程々に見える両眼でも、全く単純にこのメカニズム全体の主なことを理解することが出来ます。十歳の子供たちは星図を毎月作るようになります。教室の壁に、その星の投影図に従って時間毎、季節毎に印を付けます。子供たちが自分自身を求めているのです。十六歳前でも宇宙形態説の奥深い勉強を探究して自信を持って下さい。

現代の宇宙形態説は非常に抽象的であるとも言わなければなりません。私たちは最後から始めているのです。生徒が教わるのは、土星が地球の回りを回っているのが見える前に、土星は太陽の回りを回っていることです。答えが問題の前に来ているのです。ケプラーの法則は結局全てを台無しにして仕舞います。事実を説明する前に、それらを描写したり見せたりしても常識になっているのです。しかし科学教育は、常識にとっては奇妙なことなのです。子供は太陽に関して全てを理解することが望まれているのであり、地球ではありません。それは人が考えを敢えて言わない結果であり、全ての授業計画を調整するものです。発見したものをもう一度探し回るものであり、そのための時間を決して惜しんではなりません。もしも、少なくともその実践を考えたなら、それは真実になります。そして動物の本能は私たちが驚嘆する最も顕著な例を示していますが、決して知識には全てということがありません。もしも、あなたが人間になりたかったなら、動物は何で動物なのかを良く観察して下さい。というのも人間の蜂の巣は毎日作られているのですが、毎日それを壊さなければならないからです。

(一九一〇年九月二四日)

ソルボンヌ大学の教授たちには思想がなく、技術もなく、それでもって暴君であることを信じさせようと酷評した雑誌の記事を、私は同僚の一人に読ませました。その記事を書いたのは、大変に若い牙をもった恩知らずの学生であったのが分かります。同僚は、その記事を読んだ後に私に言いました、「あゝ、その通りだったよ」。これは本当のことです。

殆ど全員の教授たちは歳を取っています。私は精神のことを話しているのです。彼らは観念を一瞥して、観念から事実まで一瞥しに行き、ついには悲しい歴史に陥ります。彼らの生徒たちは何時も二十歳で、そこから誤解が幾つか生じます。というのも、もしもあなたが、これらの老人たちの気に入られている若者であったなら、彼らは腕をひっくり返して思い通りにやります。あるいは二十歳のミイラにして、他人の断片を縫いつけることも出来ます。気高さも誇りもない修繕屋になります。しかし最も元気澆刺とした若者は、他人の思想、思想の並木道、将来展望、出発すること、そして晴れ晴れとした朝を望みます。行進曲であり、舞踊曲であり、動きです。この年齢の時は円盤を投げるように考えます。反駁し、作り、推理し、戯言を言います。高貴な心でも間違えます。それを良しとしなければなりません。あなたは形を整えるために削り、管理します。そうです。しかし、先ずは枝を伸ばさなければなりません。

混乱したものを明瞭にします。自然はそれを望んでいます。真実は、立て直した間違いに過ぎません。プラトンもデカルトも若者です。最悪の場合には、何も残して欲しくないと思います。若しくはほぼ何でもないのであって欲しいと思いますが、彼らは自分たちの冒険精神が気に入っているのです。それらは精神の小説です。それらと一緒に思考しなかった者は、努力しないで報われる危険があります。手の施しようがない病気です。

同様に、けちな老人はショー・ウィンドーの中にある二つか三つの本物と一緒に、その周りの全てのものに羽箒を当てながら、何を望んでいるのでしょうか。作りもしなかった押し葉標本のように、それ以上に退屈なものはありません。よろしい、出掛けよう、と若者たちは言います。押し葉標本を作りましょう。

観念は一瞬であり、通り過ぎて行きます。記憶は言葉しか残しません。あるいはせいぜい冷えたイメージでしかないでしょう。嘗ては大変良くぴったりと合っていました。今では埃にまみれています。何が不足しているのでしょうか。見違えて仕舞います。私が植えた三枚の葉を付けた莖を、藪の中で如何にして見分けることが出来るのでしょうか。自分が書いたものを読み返す者は、勇気がないのです。そこでは退屈で死にそうな講義になります。無味乾燥した潤いのないこれらの歴史家たちは、既に彼らも最早信じていない歴史家になっているのです。

良い教育をするためには、記憶をなくさなければなりません。毎朝、観念をなくして目覚めなければなりません。私は、何も教えなかった老人たちの一人と知り合いになりました。老人の眉の下には、岩の上に咲く花のような子供のような眼が見えます。何もかもが彼には新鮮です。或る単純な観念に注意を向けると、老木は若返り再び緑色になるとあなたは言います。一人の人間の人生は、何人もの人間の人生に似てきます。幾つもの誕生によって増大します。しかしその純

真さは稀有ですが、余り高く評価されません。それ故に野心家が、甲冑の中のように彼らの学問の中にいるのです。甲冑の面頬（めんぼう）を下に降ろして闘うだけです。平凡な人々は、年老いた騎士が死ぬにしろ、甲冑の中に止まっていて、棒の一撃から免れることを期待します。私たちはそうではありません。何時も平手で打ちます。それが私たちの腕を良くするのです。

（一九一〇年九月二六日）

大変に貧乏な田舎娘が、福音書の印象を強く受けた考えを引き合いに出してくれと頼まれたので、彼女は全く率直に言いました、「高ぶる者は降ろされる」。明らかに彼女は、乞食が栄光にある天国を思い描いていました。しかしこの名言には、誰にでも良い警鐘を鳴らすような多くの意味があります。そして永遠の人生は、私たちの身近にあります。虚栄は重りのようなものです。それを捨てない者は、決して高くなりません。

私は何人かの詩人と知り合いです。この種の人々は屢々、意味と韻を合わせて大変満足しています。何でも驚嘆しなければなりません。そして私が平凡な詩句を何回も指摘しても、この詩句は必要なもので外の詩句よりも力強い、と良く言っていました。自分を高めるこの小さな努力は、詩人たちを深淵へ落とします。そこに詩人たちを止まらせます。でもそれは、海の神の命令によるものではありません。そうではなく、彼ら自身の努力によるものです。しかし、それは哀れを催させます。

私たちは、極端な謙譲さが無ければ、少しも偉大さを理解しません。政治家が誇張すると滑稽です。そのことは決して雄弁を排除するものではありません。人々が望んでいる情熱を排除するものではありませんが、雄弁は自然であるべきです。人間の能力に従って正確で公平であるべきです。怖がらせたいと思う者は笑わせます。全く率直に腹を立てている人間は、そのことを考えずに怖がらせます。これらの感情の微妙な違いは良くあることです。少年はそれらのことが分かっています。偉そうにする人は、少しも信望がありません。滑稽なことが列を成しています。「でも彼は何も分かっていない」とあなたは言います。それは何よりも最悪です。馬鹿に付ける薬はありません。

ものを書く芸術で主要な困難とは、注文を付けられることは全てが完全に醜悪であっても、そのことに執着していることです。大家中の大家であるスタンダールは、文章に付けたカンマも変えることがありませんでした。それでも決しておかしくないのです。そして、おかしくならぬような作家は大変に稀有です。書かれた文章では、おかしい処が始まる場所を言うことが出来ます。流儀に従って精神的に、あるいは崇高に、あるいは力強くありたいと思うのは、当然のことです。でもそんなものは愚か者のネクタイです。見て欲しいだけなのです。

重要な人物もネクタイをしています。それは十字架を背負っています。正式なパーティーで言う礼儀作法を弁えてもいませんでした。「首の回りが何て不快なんだろう。暑くて仕方がない。拷問だよ」。馬鹿らしさから逃れないでいることを考えて下さい。賢明になって下さい。力に頼る虚栄心の強い人を哀れに思ってください。花で飾ったような文章を巧みに褒めるのは止めて下さい。それは無礼でも最悪です。哀れを催させることは、滑稽でも最悪です。もしも彼がそのことを知っていたなら、の話です。しかし、彼はそのことを知っています。彼は多くの意味合いを感じています。そして、まさに降ろされているのを理解することなく、人生を低次に降ろされているのです。何故なら出世したいからです。本当に偉大な者はそんなことにはなりません。最も高い才能を持っている者が、もしもほんの少しでも過ちを直せばおかしくなります。彼はトップ

の座とか、請求する所定の地位とかに就けなくなると仮定しましょう。私は、そのことから不快感を与えられます。目撃者になるのは私です。しかし、彼がそのことに気付いて過ちを直さないでいるとするなら、私は彼のことを恥ずかしく思います。彼は高くなればなる程、高い処から落ちることになります。

(一九一〇年九月二九日)

「少年と少女たち、男性と女性の先生方、成人と青少年講座、卒業生団体のために」と大手出版社の雑誌が表紙で言っているのが「人生の門出に」です。それは決まって書かれており、一流の人物たちも紹介文で言っていることです。アカデミー会員たちであっても、アカデミー・フランセーズを超えた人々です。私は、有名な数学者のポワンカレやパルルヴェ(1)を挙げます。その雑誌は新刊で、読んでも素晴らしいです。私は企画のことを話しているのです。雑誌とは何でしょうか。人は発行者になりたい時があります。

何故なら私は、副題が余り好きではないからです。「それらの本が言っていること」。「それらのことが言っていること」。「祖先が言っていること」。「都市が求めていること」。それらは思い上がった題です。「私は全てを知っている」と少し言い過ぎているのを連想させます。でも大作家でさえも先生の文体を真似ます。

この新刊の雑誌にも思想が望まれていますし、持つことが出来ますが、出鱈目なのを私は心配しています。貧しい人々のための作品であって欲しいと思います。貧しい若者たちのための仕事に羊毛があります。彼らは、自分の思想を生むためにもその羊毛を買いに行くのでしょうか。それは心配しているところです。私は大衆化が嫌いです。或る労働者たちにX線を見せに行く人々がおりますが、彼らは映画を見るようにX線で楽しみます。私はそれが悪いとは言いません。それは彗星を見るように、普通の光景です。一般に科学は間近に止まっています。知識を植え付けなくてはならないのは、頭ではなく、足元です。つまり対象とするのは最新の発見ではなくて、最初のものであります。珍しい事実ではなくて、通常の実事です。要約することではなくて、説明することです。

私は敢えて言いますが、それは容易ではありません。出鱈目が問題になると、必ず正しい公式が引用されます。「国民のためにそれだけが満足出来ることであり、これ以上に最良のことはない」。しかし私は次のように理解しています。基礎となる最初を説明することは、これ以上に困難なことはありません。つまりそこには深い知識がなければなりません。それ自体が全て確かであればなりません。天体の動きを娘たちに説明するために私の処へ来たとしても、困惑が無い訳ではありません。しかし自由でいましょう。私の困惑は、生徒たちの無知になくはなかつたのですが、多くは私の問題であり、月の動きのようにその度に私は説明を延期して、最初の時に良く言うのです、「それは彼女たちにとっては余りに手強い」。実際にそれは私にとっても余りに手強いものでした。分かっていることを或る人に説明する時、分かっていることをその人に証明するのは彼にとっては殆ど十分に分かっていることであり、そこで行われるのは試験なのです。しかし、知らないことを或る人に説明する時、知りたいと思い理解したいと思う人である時は、申し分のないこと完全なことを私は理論的に言わなければなりません。平凡な人々は何であろうと答えます、「あなたは何を望んでいるのか。彼らは代数を知らない」。これは本当ですが、代数を覚えて何に役立てるのでしょうか。最も一般的な言葉で、全てを説明するまでになるのでしょうか。もしも彼らが驚異的な努力を生むのでしたら、この雑誌は大変なものになるでし

よう。

(一九一〇年十月二十日)

(1) ポール・パンルヴェ (一八六三～一九三三) は、関数、古典力学、飛行理論などを研究したフランスの数学者で、下院議長や首相を務めた政治家でもあった。

近頃は誰もが情熱に走って、少しばかり議論が過ぎると思います。労働の権利、自主的失業の権利、雇用者の権利、従業員の権利、旅行者の権利、そこにあるのは単純な概念です。私は、それらをお互いに分けることが出来ると言いたいのですが、神の如くそれらを選択しなければならないのでしょうか。私は寧ろ、それらの権利に関連性があり、相関的な概念であると理解しています。権利とは決して単一のものではありません。単一の権利はなく、何時も一方の権利は他方の権利によって制限されています。あるいはあなたが望んでも、或る権利の行使は結局のところ他の権利の妨害に良く遭うに違いなく、その結果については調停が行われます。従って制限のない権利は、決して権利ではありません。それは全て根拠がありません。色々な例を見てみましょう。

私には足、拳、首、肩を血液が循環する力があります。この力は、絶壁、危険、壁、群衆による沢山の方法で制限されています。しかしこの制限が強くなればなる程、権利のことを話す必要もなくなって来ます。その権利は平和な状態を前提にしています。つまり大多数の人々が受け入れた制限を前提にしており、その資格で課せられます。戦争状態の時でも、残されてあるのを強く望む人々の集団の力によって受け入れた制限です。従って私には、血液を循環させる権利がありますが、何よりも先ず私がその循環を制限して定義されるものです。というのもあなたは、例えばあなたが望むように循環させ権利を持っていますが、大したことを言っているのではありません。〈あなたが望むように〉には、権利が除かれているのです。

循環する権利は、多くの場合、私の力を増加させることであるのは確かに本当です。私は徒歩です。全速力で沢山の自動車が過ぎて行きます。私が横断する権利は殆どありません。しかし、警官が棍棒を上げます。全ての自動車が停止します。私は権利を行使します。しかし、この権利の法則は、自動車運転手の権利が小さくなったと誰もが分かります。私と運転手との間で、調停が行われます。この調停の力によって、彼には彼の権利があります。私には私の権利があります。私たち二人の権利はそれ故に決して衝突しません。でもそれらは衝突している力なのです。私たちの権利は何時も、和合と平和を前提にしています。

絶対的な権利、根拠の無い権利しかないことは私には理解出来ません。そんなことは私には、如何なる意味もないように思えます。村が燃えています。するとバケツを運ぶ人々が足りません。私には、腕組みして何もしない権利があるのでしょうか。そうでないことは良く分かります。良識はその点について躊躇しません。それ故に、もしも個人が労働の条件が気に入らなければ、絶対的に働かない権利があると言うのも何か奇妙なことです。私には、明瞭に考えることが出来ません。権利とは力であるとあなたは言うのでしょうか。それでもあなたは、全ての人間が働きたくなければ、働かない権利があると結論を下すことも出来ません。それは未だにはっきりと分かりません。奴隷たちにはこの権利がありませんでした。それは不当であり、酷いことだったとあなたは言います。よろしい。しかし、それでも私たちは権利を放置し、そしてその権利を引っ込めて私が言ったように、何時も節度を望み、調停を前提にしています。それ故に私は、所有権

も何らかの制限なくして事が運べるとは少しも考えません。同様の理由で、ストライキ権も限定する条件があります。あるいはそれはもう権利ではなくて力です。でも選択をしなければなりません。調停者に要求してはなりません。つまり〈国家〉に要求してはなりません。あなたの力を権利と見做して要求してはなりません。

(一九一〇年十月二十日)

(次号へ続く)

一ノルマンディー人のプロポ III

【2014年5月号】

<http://p.booklog.jp/book/84033>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/84033>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/84033>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ